

金沢大学附属図書館蔵『苔の衣』翻刻（一）

——京都市歴史資料館蔵『苔の衣』本文対照——

関本真乃

『苔の衣』は鎌倉時代中期に成立したと考えられる作り物語である。

諸伝本の本文は、大きく前田家尊經閣本系統・穂久邇文庫本系統の二類に分けられる。この両系統間には、しばしば長文にわたる異同が見られる。両者の先後、影響関係については、「穂久邇文庫本なるものは、前田本系の本文に注釈的敷衍的改作をほどこして生まれた」^(一)とされたこともあるが、近年では穂久邇文庫本は「本文的にすぐれている点が多いと見られるものの、中には冗長に引き延ばした表現かと疑われるところも少なからずあり、前田家本系統は穂久邇文庫本系統に比べて「本文節略の傾向が顕著ではあるが、一概に優劣を定めがたいところがある」^(二)とされる。

金沢大学附属図書館蔵本（以下金沢大学本と略称する）『苔ころも』は、穂久邇文庫本系統に分類される写本である。穂久邇文庫本系統の本文は穂久邇文庫本、『苔の衣』絵巻^(三)、秋巻のみが独立した続群書類従本『宇治大納言物語』以外翻刻されたものとは見当たらず、穂久邇文庫本系統の詳細を知るためにも、

翻刻を掲載することは有意義であると思われる。

また、金沢大学本は、京都市歴史資料館蔵『苔ころも』と、行配り字母ともほぼ一致し、両者の間には何らかの関係があることが想定される。

京都市歴史資料館蔵『苔ころも』は、各巻末に所持者であった賀茂季鷹が校合事情等を記す。それに拠ると、季鷹は寛政十一年（一七九九）から翌年にかけて『苔の衣』を校合し、朱で書き入れを行った。さらに季鷹は下巻末に以下のように記す。

此物語は江戸に侍りし比叢^(四)庫本又は内藤家の本とていとおほく世にちりぼひたるうちにてかひ得たりしを此比きふねの御社に侍りて春の日のつれ／＼なるまゝに猪苗代法眼の本をかりてあはせ見つゝ一わたり朱をくはへおく物ならし

この『苔の衣』は季鷹が江戸で買い得たもので、「牘庫」、すなわち磐城平藩の藩主内藤風虎の旧蔵本であるとする。京都市歴史資料館蔵本には季鷹による大量の書き入れが見られるが、金沢大学本にも、朱筆による傍書、見せ消し訂正、濁点等の書き込みが多く、また白色紙片による修正も見られる。両者を比較

すること、近世における物語享受の様相を窺うことも可能であろう。

なお、翻刻は数次にわたって掲載し、解題については次稿を期す。

〈書誌〉

金沢大学附属図書館蔵（七門二四類五二号）。三卷三冊。近世後期写か。

外題・内題とも「苔ころも 上（中）（下）」。

上巻七一丁（遊紙前一丁）、中巻全八六丁（遊紙前一丁）、下巻全一〇四丁（遊紙前一丁）。表紙は原表紙、青色布目に金泥墨で流水紅葉等を描く。右下部に「共三」の打付書。左上部に香色水玉模様の題簽縦九・〇cm×横三・七cmに「苔ころも 上（中）（下）」と墨書。袋綴。見返本文共紙。楮紙。

縦二七・三cm×横二〇・二cm。每半葉一〇行書き。字高上巻一四・七cm、中巻一五・九cm、下巻一四・八cm。中巻のみ一見別筆に見える。

朱筆による書き入れ、白色紙片による修正多し。

縦三・八cm×横二・〇cmの朱文長方印「浜田侯少府之図書」。

縦二・四cm×横二・四cmの朱文方印「小諸文庫」。縦六・〇cm

×横六・〇cmの朱文方印。第四高等学校図書。

背にそれぞれ「苔古呂茂上（中）（下）」と墨書。

〈凡例〉

一、字体は通行のものに統一した。

一、本文丁数については、丁のはじめに（一オ）のように示し、改行は「」で示した。

一、見せ消ちは、朱の場合 あい、墨の場合 あい で示した。朱字書き入れは「」、墨字書き入れはゴシック体、紙片の貼付であることは「」で表した。ただし、貼付紙片に見せ消ちを意味する記号が書き込まれている場合、「ヒ」のように示した。なお貼付られていない大きな紙片の書き入れについては、稿末にまとめて示した。

一、判読不能箇所は「□」で表した。

一、京都市歴史資料館蔵本との校異箇所は□で囲んで示した。

一、濁点を表さない「リ」や、「〇」「（）」等についてはできるだけ忠実に「リ」「〇」「（）」等で示した。

一、貼付紙片のみがある場合は あいう のように示した。

一、貼付紙片が訂正を示していると思われる場合、あい のように示した。

一、貼付紙片のうち、親本の字を真似て書き、本文上部に貼付たものは省略した。

（一オ）苔ころも上「あふてのこひもあはぬなけきも人の世」にはさま／＼おほかる中にこけのころも」の御なからひはかりあかぬわかれまで」ためしなくあはれなる事はなかりけり」このころ権大納言と聞ゆるは後せん」ていの御おとうと一世の源氏と聞えし」二郎たうたいの御おとうとそかし「人」さまなともゆ／＼しきおはすれはよの」人もあに君の大将よりはいますすこし」（一ウ）思ひまし聞えたり「」きたのかたふたとこ

ろ「おはす一人はこの大将との三の君三位」の中將と聞え給ひしときよりむこに「とり給たりければやむ事なきさまにはおほしなからいか成けるにか御心」をとめすあこかれ給ふをたれ／＼も「くち非しくおほしけるほどにこなか」つかさの姫君二人もち給ひたり「けりあねみやはいまた非さなくよりさい」宮にみ給ふりしかいまはくはんはく殿の「(二才)きたのかたにてならふ人なくはおはす」おとゝ宮はかたちなともいますこし「らうたきさまにもし給ひければ父」みこもあはれにかなしきもにあつか「ひ聞え給ひしほとになとなきさま」にて宮もうせ給ひしのちは心くるし「けにて母みやのかたは」に見聞え給ひ「てねんころに聞え給ひければこゝろや」すきさまにもやとおほしてゆるし給ひ「てけり六條のゐんとて一さいのゆつり」(一ウ)にてひろくおもしろきところを中つちへたてにしひんかしにへたてつくり「みかき給ひたるに東の院にはもとよ」り大将殿の三の君すたまはずにしの「かたに此君をわたり聞え給ふ人しれぬ」かしつきにし給ふを東のかたにはめさま「しくよとゝもにおほしけるほとにいとゝ」おとゝ君さふしきいてきたまひければ「いよ／＼ゆるきなくたのもしきさまに」さへおはするを大将殿のあたりにには「(三才)ゆるしなくおほしむつかれはこれぞ」非さなくよりものし給へはいますこし「としころにもなり給へるになとかく」めつらしき事もおはせさるらんと母「君などはおほしけるさまゑもんのかみさ」いしやうの中將なともの／＼しきさま「はらからたちかく人に非とるへくもな」くもてなし聞え給へはまことの御心さし「いとなければとやむことなきさまにはたの」もしけなり宮の御かたに

宰相の中「(三ウ)將なととておなし御はらからと申なから」さろかならぬ御なからひなれとたのもし「き人たちそひたる御いきほひには心」ほそけなるを大納言殿の御もてなしそ「人に非とるへくもみえ給はずかくて年」ころになり給ひぬれはあに君九つに「なり給へはこのけ」さらきにけんふくし「給ひて少將と聞ゆ二郎は七になり」給ふわらは殿上なとし給とり／＼に非ろかならぬ御ありさまよの人めてあへり「(四才)少將はまたしきにあくまでしつまりて」みえ給ふをおとゝ君はほこりにあいきやう「つきてみえ給へはみかとうくうなども」おかしきもてあそひくさとそおほしける「まことにやくはんはくとのにはひめ君はおは」すれとわか君のおはせさきけるをこゝろ「もとなくおほしわたりしほとにたまひ」かるはかりのわか君いまたふたはより「さまことにひかる源氏のちこおひもこ」れほとにはなくやとおほゆる人え給ひて「(四ウ)又なくかしつき給ふさまこちたきまでなり」北のかたこゝろうるはしくおはする人に「て此大納言殿のうへををろかならずもて」なし聞え給へはよのおほえもゆ／＼しくそ「おはするかくてとのゝ姫君八になり」給へはなつ「かたはかまき有てやかてどう」くうへとおほしめす大なこんとのには「ひめ君のおはせぬ事をは小なくおほし」て宮の御かたひとりくし聞えていし山へ「参り給ふ八月はかりの事なれはみちの」(五才)ほとなどいとおもしろしきんたちも「みなくし聞え給へりさま／＼のたひす」かたもととり／＼に非かしくみえ給ふ秋の「あはれはみやこのほかにけにいますこし」まさりけりとおほすにあふさかなと「こゆるにしかのかすかになくを聞て」思ふ事しるしそあらん非しな

へてかひ有とこそ鹿も鳴なれ」との給へは「かひありと鳴鹿の音のことならはな^鹿かへりこん相坂の関」との給ふをつきせずあはれと見給ふみてら（五ウ）にま^鹿よりつき給ひぬれはかきねわたりの山かつともなとはめつらしき見ものとおもひさ^鹿づくをところにつけたるへたうなとゆへしく御つほねしつらひさま」ひわりこなと^鹿きたるころのさまもものほそければ^鹿ん^鹿んの御ちかひもいととおもひやられてあはれなりもろ」ともに御まへにさふらひ給ふやう明ゆくほとにうみのかたをみわたしたまへはものはかなきさまの舟とも行ちかひて（六才）^鹿のかとちは何となくいとなみあひたり中くやうかはりて返さまいそかれ給はて三日になりぬれはあかつきは出給はんとてみてらのそうともなどのいと^鹿しけなるにさまの物なとたふあやしのしつめまでもおほす事ことあれはさやうにし給ふを聞にくきまていひたていのり奉るへたうめし出てことにけいめいし馬なとたまはすこよひは御まへにゐ給ふあかつきかたにこそし（六ウ）ま^鹿ろみ給ふにいひしらすたかき女^鹿のかたはらにつゐあてたかくはかりそ二葉よりことなる花はえたりとも盛の春はみもしてしをと^鹿なんえならぬ花のえたをたまはると見て御返事申さんとおほす^鹿とにへんしやうたんしやうさうし女のとよむこゑにうちおとろき給ひぬうつにもな^鹿そひたる心ちしてなつかし殿にかくと聞え給へはしるしあるへきにやとかきりなくうれしくおほす中にも（七才）みもしはてしと有つらん事をあやしきうにかにとおほすそうともに御いのりの事さま仰せ^鹿きて出

たまひぬ」みちにも御むかへの人ま^鹿よりあつまりてわさとなけれとえむなりわかき人なんとあかす^鹿かしと見給へりかへり給ひてはいつしか東の院おはして日ころのものかたりなし給へとれいの御心とけぬさまにおちしむすほほれたるもこと^鹿りにわつらはしくおほ（七ウ）されてその夜はとまり給ひぬけふは内春宮なとへま^鹿より給ふへけはいそきいそきいてたまはらは殿上のきみもくし給へりとしのほとよりはことにおほきに^鹿おはすれは霜月のほとに^鹿ふくとおほしまうくるうへはありし御ゆめののち何となくなやみわたり給へは殿はわりなくうれしとおほす事かきりなしましたきに御いのりともおほし^鹿きつかやうなるを大將殿に（八才）もり聞えてまたいか成御心ちにかとうら山しく思ふものからころやましくおほさる東のあんにも人のつらさはさる事にて我御^鹿せ思ひしられてひとかたならすおもひむすほれたまへは大納言殿もうちくの御心さしこそふかくなけれどもいまた^鹿さなくより見そめ聞え給へはかたにはいとやむことなくあはれに思ひ聞え給ふにかくうちとけぬ御けしきをころくるしくお（八ウ）ほす大將殿などにも中くありしよりものうくもてなし給ふをそあひなわさやとおほすかくて霜月になりぬれは殿の姫君の御はかまきとて世の中もいといそかはしけなりやかて春宮に参り給ひぬれは御でうとなさまいまめかしくめつらしからん事をとつくし給ふ御はかまは大宮そきせ奉り給ふそのほどのようないとこちたしなれば大宮をやかととのへむかへたてまつらせ給ふところの（九才）御とふらひさ

まゝなる中に大納言との「よりはことに心ありてみゆる御ふみには」かひありてかつく玉もの限りなくちひろの底のためしとやみん」との給へはうへの御手なりけりとおほして「御返しには」かひ有てかつく玉ものに打そふる此大海を限りしられん」その夜にも成ぬれば殿上人かむたちめ参り「あつまりていみじけなりしたてられ給へる」姫君の御ありさままことにかきりなくみえ給ふまつ「さねにこきかひねりつやちのなへ」(九ウ)てならぬにうらこきすはうのはきはほそな」かそき給へる御たけは三さ↓の木丁に「いくほとままさりたまはず御くしはほそ」なかのわきよりいますこしあまりのあふ」きのすゑをひろけたるさまして御かほ」もふくらかにけちかきものからあなつら」はしからずあきやうつきてみえ給ふを」大宮はあはれにうつくしと見給ふ女はう」廿人わらは四人つゝみな色／＼をいとなみ」つくしたりこゝかしこにいなみたるあり」(一〇オ)さまもてなしいつれもゆいナ「らすみゆ殿」のうへも大宮にたいめんし給ふ見そめき」こえ給ひしにすこしおとなひたる事も」なくわかくきよけにてとのゝまたなく」かしつき奉り給ふもことゆりにみえ給ふ」かくてことゝもはてぬればやう／＼御あ」そひはしまりぬふけゆくにしたかひ」てもものゝ音もいづれともなくあはれに」おもしろし大宮殿上の御あそひなど」にとしころ聞なれ給へれと所からにや」(一一ウ)いますこしあはれそふ心ちして権大納」言のわか君くしてまゆり給へは人／＼も」今すこしように給ふひやうしとり給ふ」ほとにとのゝ御ひはゆつり給へとはか」りうちかしこまりて給はりたまひぬ」よいありさまなといとえんなりあな」かちにゆつ

り聞え給へはわさとならずそ」かきならし給ふはちとれいの雲に」ひくはかりなりあかつきかくなる」まゝに物の音ともしみのほりてそゝろ」(一二オ)さむきに左のおとゝひやうしとりて」あなたといたし給へるなまめかし」き物からいうに聞ゆ少将の君はらは殿上」のこきみうちそへ給へるこゑいひしらす」らうたくきかまほしきをとのゝうへも」あはれに聞給ふかやうの非りにはわか」君のおさなく非はするを心もとなく」おほさるとのなどはかくものし給へは」心もとなかるへきほとにもあらすかし」あけかたになりぬれば人／＼れいのしな／＼」(一二ウ)なり大宮にうちにまゆらせたまひぬ」うへのおほつかなけにとはせ給へは姫君」のうつくしきさと申させ給へはけにこそ」女宮のなきはつれ／＼なりけれ」あまり」春宮一人は二たひなり」なとかいま一人」さやうにものし給はぬとたはふれたて」まつり給ふ御あそひそよなき大宮は」四十はかりにそなり給うへはいまひとつそ」まさり給へる春宮と聞えしより参り」そめたまひてとしころになりたまへは」(一二オ)あまたの御かた／＼さふらひ給へとやんこ」となくゆるきなきさまにおもひ聞え」給へるもしるく非のつから宮などのた」はふれにもおき聞え給はぬにとう」くうのきら／＼しくておはしませはかた」／＼いかてかおろかにはおほしめすへき」左大將殿のおほひ君こきてんとてき」ふらひ給ふをそらうたき事におほし」たれといか成にかつねはものけにわつ」らひ給ひて非さ／＼参り給ふ事もなくて」(一二ウ)右大將殿の女御めつほとてさふらひ給」としころになり給へれとなまめかしく」あくまでしなやかにおはすれといかに」そやけちか

きさまにはものし給はぬに「御とのみなとまたえ／＼なれとうへ」御こゝろあまねくてつれ／＼もはした」なからぬほとにもてなしたまひけり」かくておなしころ権大納言のわか君「くゑんふくし給とのゝ姫君春宮^本まより給ふへければかた／＼さしあひたる」(一二才)ほとなれとたたみにおほしやりつゝとふ「らひ給ふ春宮の女御まよりその夜に」なりぬれはいか成きよらをつくして「めつらしきさまにとおほしたれとかきり」ある事なれば女房廿人わらはしもつかへ」人四人つゝうるはしきさまなりとのゝうへもやかてくし聞えて参り給へり」うへ大宮などことにもてなし聞え「給ふ春宮おさなき御心にめつらしく」ゆかしくおほさる春宮は此御有様の」(一三ウ)めつらしくうつくしさをいとらうたくお」ほしたり十二にそならせ給ふあけぬれは「おり給ふはゝ宮も三日のほとはさふらひ」給ふ春宮はいとおさなきさまにてよへ」おそく御とのこもりければ日たくるま」て御あさいあるを大宮おとろかしきこえ「給ひて御ふみたてまつらせ給ふまつかさ」ねのかみにうはいのいまたひらけぬえた」につけさせ給へり女御はいまたいふかひ」なきさまにものはかなげに御とのこも」(一四才)りたれはかひもあらしとてはゝみやそ」見給ふ御手はふ(一〇)く／＼としてゆくさきお」もひやられてうつくしけなり大宮の「御くち(一〇)いれにやとおほゆるにおかしき」今はたゝひるまなまひそ梅かえのひらけぬ枝にき^本女御おとろかし聞えてそゝのかし聞え給へと」何とおほしわきたることもなくてより」ふし給ひぬれはかひなしとてうへそ御かへ」り事かき給ふむらさきの色にもほひも」えならぬに」(一四ウ)

咲やらぬ梅に木

つたふ鶯やひるまのほとはやまはゆかるらん」御つかひのきみこゝろよせあるかたにて」ことにもてなし給ふ女はうの御」しやうそく／＼たりかつつけ給へりゆ^{二八}木あ」るさまにもてなしてかへり参りぬつゝ」ましなから春宮とりて御らんしてうち」おさ給ふ大みややはゝ宮のおほすに」おさしの色このみの御あはひやとおほ」すおさなき御心にもかきりなくうつくし」(一五才)けにてひ^{二九}なことのやうなりし御あり」さまをとくあそはまほしく寛しけり」かくてお^{三〇}くに成ぬれは権大納言の少」將の君中將になり給ひぬ左大將殿の「きんたちなどともしたいのまゝにあかり」給ふさま／＼このあたりのよろこひとも」いとめてたし殿のうへの御せうとの宮」の中將と聞えしもさいしやうになり」給へりひまな^{三一}き御いそきともにはかな」くとしも暮ぬ春宮つねに女御の御かた」(一五ウ)にのみおはしましてあそひ給へはいとゆ」くすゑたのもしくみゆそのほと右大將」はかなくわつらひ給ひてうせ給ひぬれは」権大納言右大將内大臣かけたまひいつ」しかいとめてたし春もやう／＼暮て」夏になりぬれはとのゝさい^{三二}あんのうへ」の御さん^{三三}もむけにちかくなりたるにこの」たひはいか成にかつねにわつらはせ給へは」とのもしつ心なくおほしなきて御い」のりさま／＼なりこきてんの女御その」(一六才)ほと御ものゝけにいたくわつらひ給へは」うへも此ころは心やすきさまにおほした」るにまたいかにとなげかしく寛したり」右大將殿のうへもいと心ゆかすものを」おほしむすほゝるゝをかた／＼心くるしく」ちゝおとゝはおほすなとかつれ／＼なくさ」めに^{三四}おさなき人たにおはせさるらんと」くち^{三五}おしくなんこの^{三六}もゝ姫君式部卿」の宮のうへに

ておはするゆきんたち「あまたもち給へるを女君一人むかへて」
(一六ウ) つれ／＼なくさめにもてなし聞えんと「おほしてち
ゝおとゝにもさやうに申させ」給へははなれぬ御中なれはつれ
／＼なく「さめにいとよく^{〔八〕}へる事ときこえ給ふ」とのゝ此か
たへおはしたるにかくなん思ふと」の給へはつねは心よからず
のみおもはせ」奉るにさすかに心くるしけにかやうに」のたま
はん事をいかてかいなといさめ」給ふへきなればまことに非さ
な^{〔九〕}人のな」きこそつれ／＼なれたれ／＼よりもさきに」(一
七才) みそめ聞えさせしに今までさやうの事」のおはせぬこそ
くち非しけれとのたまへは「御心さしあるかたにはもいまでも
／＼出き給ふ」めれば御身にはいとめつらしけなくやこれ」より
後^{〔一〇〕}ととりさまにてこよなからん世^{〔一一〕}「か^{〔一二〕}」おほえて中／＼ふ
ようなりとうちそむ」き給へるをれのわろきことに心ゆか
す」のたまひなすとくるしくおほさるこれ」もいとあなつらは
しからず大きやかにもの」／＼しきさまにて御かたちあさやか
に」(一七ウ) らう／＼しきやうにてけちかきさまや^{〔一三〕}くれ
たまへらん御くしはすこし色めきたる」やうにて御そのすそに
いますこしたち」まさりけりとみゆ五月になりぬれば「さあ
いにまち給ふ事此月なれば御い」のりかた／＼そへ給ふいし山
もこゝることに「おほしやりつゝ御いのりの事おほせらる」十
日あまりのほどにそのけにてわつら」ひ給へはいかに／＼とお
ほすほどにその」日も暮ぬるを大將殿はゆめのこと覚し」(一
八才) あはせられていとゝ御こゝろまとひせ」られ給ふわりな
くなやみあかし給ひて」あかつきかたにことなりぬなにあや
め」もみゆましきほとなれとかきりなく此」世のものともみえ

すむつきの中よりひ」かるとはこれをいふにやとなへてならぬ」
女君の御ありさまとのほかきりなくうれしとおほすのちの事
もほとなくなり」ぬればこちの御まへれいのやうにしつ」ら
ひふせ奉りて御^{〔一四〕}ひ^{〔一五〕}なとすゝめ給ふ」(一八ウ) 日ころなや
みたまひし名こりさい／＼と」おはすればかた／＼うれしく
なとは^{〔一六〕}ろかなりかくめつらしき御ありさまを」とのゝうへ
聞給ひてうれしくおほす」めつらしき御ありさまをまたしきに」
こちたきまでおほしかしつきたる」三日「の」よは宮のさいしや
う五日の夜はこの」との七日のよはさきのさいくうし給ふ」そ
こゝろことなる春宮の女御の御とき」折おほしいてゝほそな
かのひほにむ」(一九才) すひつけてかくなん」ありそ海
の濱の真砂はかひそなき君か齡の数に^{〔一七〕}とされて」中將そひてま
しらせ給ふ御かへりには」数しらぬ濱の真砂もつきぬ也誰
にとはまし君か千とせを」く^{〔一八〕}はんはく殿のわか君三に成給ふゆ
くす多」心もとなくおほすかくて東^{〔一九〕}ゐんには式部」卿の姫君む
かへ給ひてまたなくかしつき」給ふことしは八^{〔二〇〕}巾になり給ひけ
り御かほは」ふくらかにあいきやうつきてまみのわ」たりなと
わら／＼かなるさまそしたまへる」(一九ウ) なよらかにらうた
きさまにはみえ給はす」御くしはおほくたもしけにて御たけに」
すこしはつれてみゆ中將の君しゝう」なとにあまりけと^{〔二一〕}とくも
てなし給ふをそ」殿はすさましくおほしけるきてんの」女御
の御物のけにわつらひ給ひしはたゝ」ならぬ御事なればうちの
おとゝいひしら^{〔二二〕}け」うれしく覺して御いのりかねてこちたし」
うちにもけにかやうなることめつらしく」いとあはれにおほさ
れて人めよくもて」(二〇才) なし給ふ日ころもつよくなやみ

給ふつもり」にてたのもしけなくおはするをたれ」も／＼おほしなけくこれを聞給ふにも「右のおとゝの女御とのゝわたりにはいと」と御身のほともおもひしられて人めも」はつかしくおほさるればいまは御としの「ほと」などもねひすき給ひたれば心や「すきさまにうちそひきてはやおほせ」とちゝおとゝの御こゝろ^{きこ}きてこたひに「ふるめかしくてさやうの事は覚しもかけ」(二〇ウ)ぬそわりなきやしはすにも成ぬれば「こきてんの女御この月なればうちにも」ちゝおとゝもさ^{ゆき}おほしなり右大将「殿は御とふらひにつねにまゆり給におと」とは大かたにていとみまほしくなさけあり」ておほすはつかあまりのほとに女御の「御けしきあればうちよりも御つかひ」ひまなしさはいへともたのもしき人ゝ「たちそひ給へるさまはいと物ゝしくこち」たしおきふしなやみ給ふさまあさしく(二一オ)三日もすきゆくをおとゝはおなしさまに」のみ物もおほえす覚しなけくうへも」な^のめにおほさむやはかくて五日といふ「くれつかたそからうしてことなりぬまつ」なにゝかとおほさるゝにひめ宮にていと「らうたけにおはするをおとゝはおなし」くはとほいなくおほせとうちにはかくと」き^かせ給ひて何にてもいとめつらしく「うれしくおほす女御の君のあるにも」あらておはするをこゝろゆるひなく覚し(二二ウ)けるみすほうのそうともなとはとく参り」て御いのりつかうまつる三日ちゝおとゝ五日「右大将七日うちより九日くはんはくとの」つかうまつらせ給ふ日かすふれとも女御は「たゝおなしさまにてたのもしけなく」見え給へとさすかにさてのみ過給へは「そうともはせう／＼いとま給はり帰りて」いま三四人そさふらふまれ

／＼いきのした」にはいひなることはしるく侍へりけるを「いかならんにつけてもさて心みはやとのた」(二三オ)まへと御さまのあたらしきにかやうにのたま「ふ^ふ非^ひりにはいとゝかきくらされて物も覚え」給はす女君三人おはする中にかたちなど「もいとよくものし給へはとのうへもかき」りなく思ひ聞え給ふことしそはたち」いまひとつたり給はさりける日ころに「たれも／＼おほしほれてうちやすみた」まへるくれつかたつねよりもくるしくした」まへは又いかにとおほしき^{ゆき}きてそう「なにくれとめしき^{ゆき}けとまゆる程もなく」(二二ウ)やかてきえ入給ひぬおとゝうへの御けし「きおろかならんやはたゝわれもさきに」ともたえ給へとかひなしひえはて給ひ「ぬればふたところなからおなしさまにて」おはするを人／＼ことはりにみたてまつる「うちにかくと聞せ給ひてかきりなく」あはれにおほさるゝあな^{あな}かち^{かち}にとき「めき給ふこそおはせさりつれたゝあは」れにらうたきさまにて御心くせもなく「らう／＼し^しう^うちかたらひてすこし給ふに」(二三オ)くち^{くち}非^ひし^しからさりつるに今はとおほし「つゝくるいとあはれなりさるところに」姫君のものはかなくておはすらんと心「くるし^{くるし}て少将の命婦を御つかひに」奉りて大納言のすけのもとへ御^ごみ^みの「ほとはわたり聞え給ひかひなき事は」さる事に殿うへのおなしさまにて「おはするをそさきものかみさいしやう」などとはいかなる^ききにかとおほしなけく「よろつ何事も此人／＼そつかうまつり給ふ」(二三ウ)かくてあるへきならねは三日すきた「まひてそいはかきといふところゝわたし」聞え給ふとしの暮なれと此とのには涙^{なみだ}ぞ」ひまなきみかともこよひそかしと覚しやうなる

にいとゝあはれにてたゝひとゝりなかもいたし給ふ雪にみちも
みえしゝかしとふりつもればゝ なき人の煙やそれと詠れは
雪けの雲もなつかしき哉」とひとりこちて御涙をしのこはせ給
ふゝいはかきにはたゝ時のほとけふりにてゝ（二四才）あか
り給ひぬるをまたゆめかとおもひゝまとへりかくて御いみの事
なと覺しゝききつるもいとかなしはかなくとしもゝかはりても
のゝは小なきさまにてむ月ゝもたちぬ御ほうしにもなりぬれは
うちゝよりもさるへきさまにおほしききてゝた中ゝかくて
し事もゝに御心さしみゆゝるにいと非しくかなしくおほす事
よのゝつねならす右大将には姫君のいまひとゝゝそひていよ
ゝゝひかり給ふをかひありてゝ（二四ウ）おほしかしつくはか
なく月日うつりてゝやうゝふゆにもなりぬれは女御の御ゝは
てとて内大臣殿にはいそき給ふにもゝあはれはつきせすまこと
や姫君御いみ過ゝにしかはそれをたになくさめにとておゝとゝ
むかへ給ひしそかし右大将殿の宮のゝ御かた此春のほとに御く
休んはたしにゝ石山えまより給ふへき御まうけし給ふゝこのた
ひは七日はかりとおほしたりれいゝのきんたちくし給へりみち
のほといとゝ（二五才）えんにて霞へたつるあふさかのわたり
なゝとは心にしめたるわかき人ゝゝなどはゝたくひなく思ひた
りまよりつき給ひゝぬれは御てらにはれいの御まうけなゝゝく
れなといとなみあひたり心はせともゝおかしくみ給ふ海つらも
こゝもとなればゝわかききんたち女はうともふねにのゝりてあ
そひあひいくとせもかくてゝすくしつへくそ思ひけるとうゝ
へなどもゝさまゝゝものたまはせなとして七日もゝ（二五ウ）
ほとなく過ぬればあかつき出給ひなんとゝするにへたうのもと

よりおかしきこゝにゝわらひつくゝくしなとやうの物入てまゝ
らゝせたるをとゝころにつけておかしくみ給ふゝこゝにたてまつる
ものゝうへにゝ 野に出て君かためにと思ふにはわらひを
るてもあつからぬかなゝとあるをはかなきことなれとおかし
くいゝなしたるものかなとおほしてさうそくゝひとくたりつゝ
はすあかつきには御むかへゝの人ゝゝまよりつとひてそゝのか
し聞ゆればゝ（二六才）出給ひぬみてらの人ゝゝも日ころにな
らひゝてひきかへましくおほえけりかへりてゝいつしか姫君み
給へは此七日のほとにゝおとなひ給ひていますこしうつくし
さまゝさり給へりきのふにはけふはまさるやうゝなる御ありさま
をかきりなくめつらかにゝ見給ふうちのおとゝなどにもひさし
くゝたいめしたまはねは女御の御ことのちゝきとろへ給へる
をあはれにみ給ふきんたゝちおほしくおはすれときさなくより
比ゝ（二六ウ）女御をはゝことにおもひ聞え給ひしにかやうにゝ
みなし聞え給ひて後つねは心よからずゝわつらひ給ひてありき
などもきさゝしゝ給はすそありけるひるつかたになりぬれゝ
は内春宮などゝにまより給ひて夜ふけゝてそかへり給ふ東ゐんに
おはしにたればゝ見えぬさまにまきはし給ひて宮のゝ姫君の
ことこちたくもてなしさたしゝ給ふを心きさなくと心つきなく
おほさゝゝれてことはすくなにてたちたまひぬゝ（二七才）をみ
こそかゝらめ此姫君をたにすくれてゝおほしかまへたりかくて
としもはかなくゝゆきかへりて姫君ゝになり給へはことしはゝ
はかまきせ奉らんとおほしのたまふにまゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
はかまきいそき給ふゝになま心つきなくてさらは姫君のはかまゝ
きは冬つかたとおほしなりぬかゝるほとにゝとのゝわかきみ七

になり給へはわらは殿上」し給ひてやかてくゑんふくし給ふへし」とのゝ^{〔イ〕}ありあひたるかたゝ大事おほく(二七ウ)あるとしにこそうちのおとゝはありし女」御の後はやとゝもにわつらひ給ひしを」すきにしほとは御なけきにやなとたれもゝ覺ししほとにあつけにや此ほとは」いますこしくるししくし給へとそれにも」さはらず左大将殿の東の御かたには御はか」まきの事おほしたちたり六月廿日の」ほとなりちゝ君そめつらしけなけれと」はかまぎせさせ給ふへき大将殿はいと心」ゆきてもおほされぬ事なれはあなか(二八才)ちにくちいれさせ給ふ事もなきをうへは」れいのおほしむつかりて心ひとつにいた」ちさたし給ふそのよになりぬれは事」ともおきて給ふはてぬれは人ゝに」かつけ物しな^{〔ロ〕}なりおとゝのわつらひ」給ふにはゝかりて御あそひなともなし」さいみんには姫君の御はかまき此事に」よりてのひぬるをいかにそやおほし」たるけしきもなくてとのゝおほし^{〔ハ〕}きつるまゝなるを人を見るにもとつ(二八ウ)きせすらうた^{〔ニ〕}くおほされけり秋にも」成にけりうちのおとゝの御なやみあつけ」にやなと覺したりしかとすこしすゝしき風まちてもいますこしあつけさまさ」りてみえ給へはいか成^{〔ホ〕}き事にかときん」たちなとは覺しき^{〔ヘ〕}く日をへつゝよ^{〔ヘ〕}り給へはたのみすくなきをうちなとは」あはれにきかせ給ふ大かたの人さまな」とすくよかにおはしければみかともお」ほしなけきたり日ゝにそへてまさり給ひ(二九才)つゝ大将も大臣もしし給ひてしゆつ」けの御いとま申給ふにたれもゝ覺し」おとろきたりみかともいかにてかとか」とはの給ふへき右大将ももり聞おと」ろきてま^{〔ニ〕}り給へりよとゝもにゆるし」なく覺し

むつかりてれいさまにもお^{〔ロ〕}さゝたいめ^{〔ロ〕}なとし給ふ事ありかたか」りつるにいかにおほ^{〔ロ〕}すにか人ゝのけて」こなたへと^{〔ロ〕}の給へはつねにおはするかたへ」入給へりまことにむけによ^{〔ロ〕}く成給へる(二九ウ)さまにみえ給へはこれほとになり給ふ」までおほ^{〔ロ〕}つかなくてすこしけるよと」おほすけしきはかりな^{〔ロ〕}しひきかけて」^{〔ロ〕}ほししとけなけにひきいれてけ^{〔ロ〕}そくにかり給ひておはするもののい」はまほしけにてちとの給へはちかく」さしより給ひたるに浅ましく^{〔ロ〕}のつから」したしきやうになともなくいもうとゝう」ちななる人たにさふらはねはまたもの」申かよはすかたゝになきにいとゝたのもし(三〇才)きさまにもたのみたてまつりて^{〔ロ〕}なるか」ならすおもひ聞ゆれとなにとなくそはゝ」なるやうにてつねにもたいめ^{〔ロ〕}なとか」たくて心より外にすき侍るを^{〔ロ〕}のか」ともとへちにはかゝしくみえ侍へらねと」もそれはいかにしてもよに侍るもの也」あまたの中^{〔ロ〕}にいか成ちきりにかこきて」むはいまたいとけなきよ^{〔ロ〕}りまことに」人におとらす見なさまほしく思ひ侍し」かともそのほいかなはすしてかひなくいのち(三〇ウ)さへみしかくしも侍へりければ申かた」なくこそそののこりの人ゝも^{〔ロ〕}われすく」せくち^{〔ロ〕}おしく侍小りければ心やすく」心ゆきなるも侍小らねはしきふ卿の」うへなとはたうしともかくも覺えたる」かた侍へらす東あんに侍らへはいまたい」とけなくよりかやうにも申つけたりし」かはせうゝのとかはおほしもゆるせ」か^{〔ロ〕}しとおもひ侍へりてさうなくゆつり」侍小りしかと身のす^{〔ロ〕}くせをはしらす(三一才)あけくれものをのみ思ひむす^{〔ロ〕}れ」侍小れは見たまへらるゝたひにむね」いたく侍へれといまはそ

れとかく申へき」に侍卜らすむなしくたちかくれなん」のち人
わらはれにあはしきさまに」もてなしたまはてたうしのほ
とにて」たに侍へらはさまなかへて中へ心や」すきさま
にてのとやかに侍卜りなん」さやうにおもひまきてさせ給は
んをそ」此よのほかのよろこひと思ひ聞えさす」(三二ウ)へ
きまた姫君の御事はうちおほし」ませはさりとともとおもひ侍
れとも女」の御身にはかしく御うしろみなき」はいとはか
なきものなりこれに侍る」まのかことものおもひまきたらん事
は」見はなち聞はなち給はて覺しうしろ」み給へとてましのこ
ひつゝいとくるしけ」にの給ふこのとしころうへのゆきに」ゆ
るしなくひんなきものにおほしつるか」いとわつらはしかりつ
るにいまはなかく」(三三才)うちのみの給へははつかしき
ものから」いとあはれにて御かへり事聞え給ふ」へきかたなけ
れといとつれなくも見なし」て東院の御事はさらにとかく申す
に」まよはす宮の御事かひなき身なからも」心のまよはんかき
りはいかてまろ」かにおもひ聞えさせんなどたのもし」けに
申給へはいとうれしと覺したり」日暮ぬれは我北のかたも宮の
うへも」これにわたり給へればわか御かたへわた」(三二ウ)
り給ひてこ夜はとまり給ひぬさす」かにおとろしくはな
くて日にそへて」よまよおはするそいかなるへき御さまに」か
とあさましき二三日はかくておはす」るにたゝおなしさまにて
みえ給へは」姫君もこひしくてさいぬんへわたり」給ふうへは
しろきうすものゝひとまな」よゆかなるくれなゐのうづるはか
りな」るはかまき給ひて姫君とあそひて」はしちかくゐたまへ
るに殿のおはすれば」(三三才)すこしめさり入給ひてれいの

なに心」もなくらうたきさまにもてなしてお」はするさまそと
もに二三ばかりぞあ」まり給へるほとにていとわかうこめかし」
けにてあくまてなよひたるけしきそ」し給へる姫君はいまたい
とけなきほ」となれとなまめかしきものからあい」きやうつき
はつかしけなるけそいまひと」しほたちまさりてみえ給ふたゝ
今うち」より中将いてゝこなたへまよりたまへる」(三三ウ)
いまたきすいなるへきほとなればもて」なしよういなとなまめ
かしくおとなしく」しくおはするをとのうへめのとひまな」く
うちまみて見聞え給ふは」宮に姫君にもいとよくおほえ給
へりしう」の君はちゝ君にに給へるにやすこしはな」
とあいきやうつきてそおはするかくて」九月にもなりぬれはかせ
のけしき」心ほそくはたさむきにうちのおと」の御心ち此ほ
とゝなりてはまのつからおきる」(三四才)なとし給ふ事もま
さしくなしかゆなとも」はかしく見れ給はす十日はかり」
にもなりぬれはあさましくたのみ」すくなくみえ給ふにまのつ
からそのしるし」もやとぬしもほいふかくおほしたる事」なれ
は九月十九日ゆつけしたまへるに」うへもやかてさまかへ給
ふわくかたなく」としころになり給ひぬれはおなしことゝい
ひなからいかてまろ」かにも覺されん」かきりある事なれば何
のしるしもなくて」(三四ウ)三日といふにつまにかきりのさ
まにな」りはて給ひぬうちにもきかせ給ひて」大かたの人から
なとおもしくおはしつる」人なればさるへき人」もおほ
しなけく」中にもみかといとあはれに覺さるゝ大」将殿もつね
は心ゆかすおほしむつかりし」こそわつらはしかりしか大かた
にはいと」おもひやり有てたのもしかりし御心」とおほせはあ

はれ浅からすおほすうへ」のいたくなけき入給へる心くるしければ「(三三才) なくさめたまはんとてやかてくし聞えて」かへり給ひぬ姫君はうちへむかへ聞え」給ふ宮のうへもかへり給ひぬいとゝあま」うへも心ほそくおほし入たるをさゑもんのかみさいしやうなどそよるつにつかう」まつり給ふ七日の御ほとけくやうなど」そきんたちおほくおはしませはいとたの」もしけななく御法事もすき」ぬれは人ゆきわかれ給ひぬ大将の御もとよりさゑもんのもとへ」(三五ウ)

今はとて別れもくれにけふは又立帰りつゝ物や悲しき」しのひかたてて御かへりには」悲しさは別れし暮につきはてゝ今はひたすら袖そ朽ぬる」月日ほとなくすきぬれはわすれくさ」おふるならひにてのみあるにふるさと」のあまうへそつきせすおほしりたる」霜月にもなりぬれは五そぢはてて」とのゝわか君のけんふくとて世の中」さづきあひたりその日になりてわらは」殿上に内春宮などにまゝりありき給ふ」(三六才)御くしはゐたけにすこしあまりたるほ」にてきらゝとうつくしけれ御かほは」ふくらかにあいきやうつきたる物からあてになまめかしく見たてまつる人もすゝろにみまほし心ちするにけたかく」ものはつかしけなる物から御もてなし」などすへて此世のものともみえ給はぬを」うち春宮もめつらし」よのつねに思ひ」聞え給はんやは大みやもあはれにみ聞」え給ふとうくうの御かたへまゆりたまへは」(三六ウ) これも又うつくしけにていまはおとなしく」もてなし給ふよいなとけたかくもの」はつかしけなるさまとりゝにうつくし」うみ聞え給ふ」このほとすこしわつらひ」給ふとておもやせ給へるしも

いとゝなま」めかしく見え給ふひぬ殿にはさるへき人々」まゐりつとひたまひて御事ともはし」まりたるきしきおろかならんやは御」ひきいれはむかし覚え給ふ人として右の」おとゝそつかうまつり給ふ御ことゝもはて」(三七才) ぬれは人ゆのかつけものみなれいの」ことし御あけまきりはよのつねならず」かくてこそ見たてまつるへかりけれと」いまひときはひかりそひ給ふさるへき」むすめもち給ふ人はまたしきにめとま」り給ふ右大臣かけ給ふ宮の宰相」中納言にあまり給ひにたり右のおと」のとたらう梅つほの御せうと権大納言と」聞えし右大將かけ給ふさまゝいまめか」しき事ともにうちのおとゝのきん達」(三七ウ) みなこもりおはするそいとあはれなる」年も暮ぬれはうちのおとゝのさい院」の姫君の御はかまきにほいなくとまりにし」春のほとにと覚えしそくきさらき」の十日はかりにとおほしきたまりぬ」女はうのさうそくなどまて心ことにし」給ふ大かたのありさまと覺したりその日」になりぬ人ゝの御とふらひなととりゝに」みゆ御こしはとのゝうへゆひ奉り給ふへ」ければ殿わたし聞え給ふしつまりぬれは」(三八才) うちみ聞え給ふに姫君の御ありさま」すへてこのよの物とも見えたまはす」たゝあたりもかゝやくこゝちするをめ」つらかにみ給ふ御くしは御こしのほとと」りもなかくてあたけはかりにそみえ」給ふちよさき御ありさまにひまなく」かゝりたる御かんさし御かほのふくらか」にあいきやうつきてにほひある物から」あてになまめかしくらうゝしくていか」にそやけたかくさい宮もおほしあき」(三八ウ) れたり女御をかきりなきさまと思ひ」聞えさせしかとそれはこめかしくけた」かきさ

まにて人よりことにみえ給へり」これはまたさまことにめつらしき御あり」さまありかたくと見給ふかくて事とも」はてぬれはかへりたまふをあかす思ひ」聞え給ふをはみや姫君のうつくしさ」を返す／＼めて聞え給ふかくてかへり」給ひぬれはことの外にのとなるこ」ちし給ふ東院にはかくさま／＼にもて」(三九才) なし給ふにきんたちのひとりもおほせ」ぬ事をわか御すくせくち^{おほ}しくおほ」さるゝまゝに宮の姫君をいかにせん」とあたりくるしきまでもてなしかし」つき給ふを殿もこゝろえてことにさし」出もし給はねはまろかする事な」れはとむつかり給ふされとこうち」のおとゝのいまはのをりの給ひしことを」おほせは中／＼見給ふをりよりはこよ」なくよついてもみなし聞え給ふかくて」(三九ウ) ひとつにおはすれと^{おほ}のつから姫君」などの御事をはいかにとこと葉のす」ゑにもかけ給はす中将などのまゆり給へるにもことにみいれぬさまに」ふしめにおはするを殿はすさましく」おほすまことや春宮の女御のわつらは」せ給ひしはたゝならぬ御こゝちなりけ」れはいまた^{おほ}さなき御ほとにいかにと」うれしきものからあやむくとのうへ」おほさる御かと春宮などのおほしよろ」(四〇才) こはせ給ふ事かきりなし^{おほ}ま^{おほ}さしきに」御いのりひまなし三月廿日にそ出給ふ」春宮はゆるしかたくおもひきこえ給ふ」く^{おほ}んはく殿にはまたこと／＼なし内の」おとゝ権大納言などともにまゆりつかう」まつり給ふ春宮よりは御使ひまなくて」いらせ給へとのみあれはそのほと神わざ」などはてゝそ三日まゆり給ふはゝ宮は」女御の御ありさまのまたなくらうたけ」にみえ給ふをうちのおとゝのひめきみ」(四〇ウ) おほし出らるゝま

ことや中将三位した」まひしそかし^{おほ}さなくきよなる御さ」まのよのつねの人ともなくあくまで物」はつかしけなりまみのわたりよき人と」ちはかよふにやいとよくありし姫君に」おほえ給へはいつれもあなうつくしと」うち^{おほ}まみつゝ見たまへり女御は^{おほ}日比なや」み給^{おほ}るけにやすこしおもやせ給へるに」しろき御そえひそめのほそなかなよ」らかにきなし給ひて木丁すこし^{おほ}し」(四一才) やりてそひふし給へる御さままたなく」らうたけにあいきやうつきこめかしくみえ」給ふに御くしいとこちたくて御そのすそ」にたりたぬほとにいとをよりかけ」たるやうにひまなくかゝりて御かんさしな」とはたれにも^{おほ}と^{おほ}り給はしとみ奉る」給ふそゝろにあたりもかゝやくやうなる」ことやな^{おほ}ありしほかけの姫君やまさ」るらんとおほす御心そにくきこの女御」をこそたくひなき事にのゝしるにな」(四一ウ) たくひありかたかりしおもかけわすら」れたまはすかし夏にも成ぬれはあつき」を人／＼なけくにかと何となくわつらひ」給ふ事しけゝれは我御世もすゑになる」心ちし給ふ^{おほ}りゐさせ給ふへき御ほい」ふかきにつけても春宮の女御わかきみ」にておはしまさはいかにめてたからま」しとそおほす帥の宮のうへわつらひ」給ひしもこのほとにうせ給ひてひと」りおはするに東院には姫君をあはせ」(四二才) 奉らせはやと覺して心まうけしたまふ」うちに大宮そならふ人なくておはします」そのしたの女御たちあまたさふらひ給へ」とはか／＼しき^{おほ}事も聞えさ^{おほ}り春宮」には女御の君すきまなくそひたまへは」よの人／＼のま^{おほ}らひにくけなり」さりとてたゝ人などに思ひゆつらんはものす」なかるへし此宮は年などもねひすき給へ」れ

とゆよくちち書かしからぬ人なりとひた「おもひききに覺しなりぬるをいとゝ姫ひめ」(四二才)君のせうなこんのめのとつゝきありて「いひければ宮よりも時／＼けしきたち」給へるに心ゆき給ひて御返しなと聞え「たまふ殿にも此よしを聞え給へはいかに」も御こゝろにこそとゆるしきこえ給ふ「さもあらはふゆつかたなとにもとおほし」いそぎたり八月になりぬれば女御の「御事うち春宮より御いのりとおと」ろ／＼しくあめのしたのひきみちたる」をいへはさら也殿には覺しきおぼしき事こと」(四三才)おろかならんやはおうちのおとゝ心こゝろせお「はする人にてことに御いのりなとつかう」まつり給ふ十日のほとにそのけしき「あれは宮／＼の御つかひ内春宮のはさら」にもいはす馬車のうまぐるまとおと／＼しき「までゆきちかふいたうもなやみ給はて」かきりなきなきとこにておはすれば「たれも／＼おろかにおもひ聞え給はん」やはいつしか御はかしもちてまよりたり「内大宮などの覺しよろこひたるさま」(四三才)殿うへにおほとらすぞみえ給ふ御うふやのき「しきありさまよのつねならんやは三日大」殿五日内大臣殿七日内九日大宮誰も／＼いとみかはしたるさまめつらかなりとう／＼くうはいらせ給はんことを／＼もとなく「まちわひさせ給ふ十月一日の比にわか」宮くし聞え給ひてまより給ふいまひと「きはおも／＼しさそひ給へる御おほえ」いはんかたなしわか宮のうつくしさを「大宮みかとかきりなきものともて」(四四才)かしつき聞え給ふ春宮もやむ事なき「ものにそ思ひ聞えさせ給ふ霜月にも」なりぬれば内のおとゝの東院のひめ「君の御事此ほとゝ覺しいそぎたり」内大臣殿はもてはつかしけにおはする「宮をこゝろはやりのまゝにかたはらいた

き」事やし出給はんとおほせとさやうの「事のためをは人にくゝとひとへにむつ」かり給ふもむつかしければたゝまかせき「こえて見給ふそのよになりぬれば宮の」(四四才)おほさん事もさすかなればきんたち「くして事ともおこなひてまち給ふさうし」みもいみしくしたてられ給へりこれも「くち書しからぬそかし御かほはまろらかに」ふくよかにてまみのわたりくちつき「あいきやうつきてあくまてほこりに」にきは／＼しうそみゆる御色そすこし「おほつかなき御くしもおほくてたけは」かりそのし給ふ御としは十六になり「おほ給へは何事もねひとゝのひて」(四五才)さかりにみえ給ふいたくふけぬさきに「宮わたり給ふ御としなとおとなひた」まへともてなしなまめかしく色いろにおは「する人にていかにそおはする御かたち」なとはいとよからねとあてやかなよひ「給へりいつしか姫君の御ありさまみ給ふ」にくち書しからすみるかひありてそお「ほさるゝほとなくあけぬるもなこり」おほくかへり給ひてほとなく御ふみあ「るにそは／＼へむねおちゐて御心」(四五才)中きたる姫君のいまたふしたまへる「ところへもちておはしてそゝのかした」まへとおきあかり給はねはひきときて「見給ふに」よそにのみ思ひし物を曉の別れはけにぞ露なみだけかりける「御返しはやかて母うへそかき給ふ」おき出る露になみだそほちつゝ我身も共にきえぬへきかな「御使のろくなとめやすきさまなりい」ろめきたるでのいみしく筆ふできえたる「さましたりけるもすきぬればひるなとも」(四六才)うちかたらひて見給ふにたくひなきには「あらねとくち書しからぬそかしかくて」としもかへりぬれば春宮のわか宮」としそひていとうつくしうみえ

たまふ」みかとも何となくことにふれて御代の「すゑになりぬる心ちし給ふにまうけの」君のおはせさりしかは覺しあつかひ」給ひたりしにいまはこゝろやすければ」ひとへに^お非りぬさせ給ひなんの御心も」うけなりおなしみかと、申せと御心」(四六ウ) あまねくてかすならぬしつの^お非までも」おほしはこくみてうるはしかりつる御ま」つりことを^お非し聞えぬ人なし殿なども」ゆるしたてまつり給はねと物のさとし」しけゝれはいかさまにものとかに覺し」て四月一日に御くにゆつりありわか宮」春宮にぬ給ひぬる事があるへき事」なれとほかにつけてはよの人もめてあへりみかとも^お非さし／＼しかるへきほとに」おほしませはこれそいとゝは^お非しく(四七オ) そみえ給ふ女御はやかてきさきにそたちた」まふ^お非りぬのみかとは冷泉院とそ聞え」さする内のおとゝのさいみんのうへこの」春のころよりなにとなくわつらひ給へは」れいの御事にやとおほすにさはなくて」おとろ／＼しうはみえたまはぬものから」たゝいつとな^お非こゝろほそけに」おほしてうちなきなとし給ふをとのは」いかにおほすならんとあやしくしつ心」なくおほされて御いのりなとはしめ給へは」(四七ウ) はか／＼しきしるしもみえずおなしさま」にのみものなとも露みいれたまはすほと」ふるを殿もおほしなげくせんさいくう」にもひめきみの御事を御こゝちのひ」まにはこまやかにかきつゝ聞え給ふを」いか成へき御心にかといとあはれにおほ」さるいつれも／＼御心ひろきやうにて」はらかなともあまたおはせねはかき」りなく思ひかはし給ふ御とふらひなとひ」まなくこまやかにておほしやるを内の」(四八オ) おとゝはありかたしとかしこまり申たまふ」

夏もやう／＼すきぬれと此御心ち只おなし」さまなり日ころふるまゝによ^お非けにのみ」なりまさり給ふ御心にもきんたちの御」ことをうしろめたけにおほしつゝ殿にも」^お非り／＼にわさとなくて聞え給ふ中にも」ひめ君の御ことはあさからすおほしいりつゝ」の給ふを殿もよろしくおほされんやは」中将などはいまはかひなかるへきほとにも」おはせねは何事もおと／＼しくさたし」(四八ウ) 給ふしゝうは十四にもなり給へは^お非れも^お非さなかるへきほとにもあらす姫君いまた」いはけなかるへきほとなれといとおとな／＼しくしつまりつゝかくわつらひ給ふを覺し」なげくをみ給ふにもいよ／＼見すて給へはん事かなしくおほさる東院も^お非の」つからわたり給ふにもいかななどのたまふ」こともなくて心ちよけに覺しつゝ宮の」御あつかひなにかやとし給ふもれいの」事なれと心つきなくつゝに思ひかなひ」(四九オ) てやおほされんと心うくそおほさるゝ」かくて秋もすきぬれはよ^お非りゆく虫の」こゑ／＼もわか身のうへとのみおほさる」紅葉をさそふ木からしもことに身にしむ」心ちして此たひはかりにやとおほさる」るまゝに姫君も露もかたはらさらすもて」なし給ふこのほとゝなりては御こゝちもむ」けによ^お非／＼しくなりまさりてつねは」きえいり／＼し給ふを^お非ろかに覺され」むやは宮の中納言などは目ゝに参りて」(四九ウ) とふらひ聞え給ふいかにしてせんさいくうに」いま一たびたいめんし奉らんとおほしけ」るをより聞給ひていとかなし／＼おほさるれば忍びてわたり給へりかきりな」くかなしとおほしたるさまあはれなり」ありしにもあらすかけなとのやうにて」ふし給へるをみ給ふに今までおほつかな」くてすくしつらんよとか

きりなくおほ」さるゝいとゝたゆけにおほしなからある」かな
きかの御さまにも君たちの事を」（五〇才）いとうしろめたけ
にのたまひていみしくなき給ふ中に中将しゝうなとは非とこ
の身なれはいかさまにても心やすきかた」も侍へり姫君のいま
たいはけなきほど」をかひなきわれさへゆきかくれ侍へり」な
んことをいとかなしくうしろめたく侍る」をおとゝなともたゝ
今は~~ま~~るかならず見へ侍へれと~~非~~とはものにこまかならぬ」
ものなれはいかやうにかあらゝしきさま」にてやさすらへむ
となり侍へりなんと」（五〇ウ）おもへはかきりあらんみちも
やすかるまし」きとていみしくなき給ふ御心さしのほど」をも
のしりて侍へればさりとともと思ひ」聞えて侍るをゆめゝはか
なきさまに」なとさすらはせて此人のゆく~~ま~~かはらぬき」まに
はくゝませ給へなといとよ~~ま~~けに」いひもやらす聞ゆへくもな
くの給ひつゝ」くるを聞給ふに~~ま~~るかにおほされんや」はかた
みになみたにくらされつゝのたまひ」つゝすへくもあらねとひ
めきみの御事は」（五一才）ゆめゝうしろめたくなおもひ聞
え給ひそ」いかで露おろかにおもひ聞えさすへき」たゝわくか
たなく此年比たのもしきかた」にもたのみ聞えさせつるにうち
すてゝ」たちまちにさきたち給はん事いとかなし」くとしてせき
かね給へるにいたくふけ」ぬれはいまはとくかへり給ひね
とのた」まひなからまたいつかはとおほすにこゝろ」ほそくか
なしくてひきとゝめ聞え給ふに」かへり給ふへき心ちもしたま
はねと誠に」（五一ウ）あけかたになりぬれはのり給ふ道すか
らも」ありつるおもかけのみたちそひたる心ち」していとあは
れにおほさるかへり給ひ」ていつしか人奉り給ふあくる日より

は」いたうくるしさまさり給へはところゝより」御とふらひす
ほうひまなしましておとゝの」御こゝち~~ま~~るかならんやは
つ~~ま~~にそのゆふ」つかたあさちの露よりもはかなくてき」えは
て給ひぬるをゆめかと覺しあき」れ給へはいふかひなきさまに
のみなりまさ」（五二才）り給へはかひなくてときもかはりゆ
くさ」てあるへき事ならねはれいのさほうに」~~ま~~さめ給ふとし
ころさふらひつきたる」女房きんたちなとはいと物さ~~ま~~かしき
ま」てなきのゝしる姫君いはけなき御心ち」におほしまとひた
るさまみ給ふにそ」いとゝもよほさるゝ心ちし給ふ人ゝの」
けて火なともしてほかは又さしより」つゝみ給へはいたくあ
をみやせたまへれと」わかくらうたけにてなに心なくふし給へ
るを」（五二ウ）見給ふにゆめの心ちし給ふ御くしはいたく」
ほそりてたけに二たつばかりやあまり」給ひたらんとみえてひ
きゆひつゝ枕に」うち~~ま~~かれたりことしそ卅六になり」給ふい
またいとわかくおはしけるせん斎」宮はかくと聞給ひてあはれ
とも~~ま~~る」かにやはおほさるゝひめ君の御事を返す」ゝのた
まひ~~ま~~きしなとおほしいつるに」東院など御こゝろ~~ま~~きていと
おとなけ」なくおはするを聞えき給へればまことに」（五三才）
いかでもてなさんとうしろめたくおほ」さるゝ三日すきて山の
井といふ所に」ちゝ宮の御はかありければわたし聞え」給ひけ
りきんたちふたところおとなしく」御ともし給ふいづれもわか
すふかくそめ」給へる御その色ともみたてまつる人ゝ」あは
れにおほすいたくさえて雪うち」ちり風なとふきて世のけしき
物哀」なれはいとゝゆきもやらず」なら山の井へお」はしつ
きて見給ふに年へければ御はかの」（五三ウ）あたりもいと物

むつかしけにて草おひしけりたるをわけ入てそほとちかき」
ほとに^おぢさめ奉り給ふあけかたに成ぬれ」はかへり給はんとし
給ふにもこれやかき」^おりとまたかきくらされ給ふ中将のいと」
おとなしく^お事とも^おまきて給ひながら」これもえたためらひあ
へ給はぬを人くも」しのひかたく見たてまつるしうはいと」
ほこりかにあいきやうつき心ちよけなる」御さまにいたくなき
給へるとみゆるまみの」(五四才)わたりいとよくおほえたり
み給ふも」いとかなしかへり給ひてひころおはし」つるところ
いつしかしつらひておはする」心ちいはんかたなし姫君のある
ましき」まで覺し入たるさまこと^おづりなからいと」あや^おまきか
なと御めのとともいひなくさ」めていとかなしく思へり殿は東
院へも」わたり給はてやかてこの御かたにてなく」さめにはよ
るひるわかす御おこなひし給ふ」さきのさいくうみやの中納言
なともほとけ」(五四ウ)くやうし給ひなくくも御いみもす
ゑに成」ぬれはこれさへ心ほそくなこり^おぢしく覺」さるくし
うのきみはうへの御^おおち兵部」卿と聞え給ひし姫君のさき
の斎院に」ておはするか^おぢさなくよりこにした」まひてまたな
くあつかひかしつききこえ」給ひしかは母うへもこれはかり御
心や」すぐ覺したりき中将はいまはおとなしく」なり給ひけれ
は人くあまたけしき」たち給ふ中にも宮の中納言梅つほ」(五
五才)の御せうとのゑもんのかみなどはこうへ」もさやうにと
おほしたりしかといかなる」心にかいつしかさやうにさたまり
てゆる」きなからんことはわつらはしかりぬへくと」おほして
ものうけにのみ申給ひしかは」のたまひやりたることもなくか
くて過る」なりけりさるは忍ひたるところく人」あまたかよ

ひものし給へととりわき物」ものしきさまにみゆる人もいとな
し」中宮のひやうゑのないしをそをりく」に」(五五ウ)つけ
ては心あるさまにおほしたりける」此ほとのためまもさすかに
くるしく」おほして雪かきくらしふる夕暮に」^おまかしきす^おし
んして」^おとはてのみあはぬ絶まを歎くには心そゆきと降く
らしける」とかれたれば日比のたえまもうら」めしなから^おぢ
りからもすくしかたくて」ゆきとまる心もしらすとはての
み過る絶まはいかうからぬ」かきさまなどのゆ^おまなからぬも
あはれと」み給ふはかなくて御^おやみも過ぬれは内の」(五六才)
おとゝなとはまきるゝかたなくおほす」まゝに姫君のいたくお
もひ入給ひつるを」なくさめなからわれもうちしほれ給ふ」さ
いしやうのめのとにまきはし聞ゆ」過^おまきよしなといひ^おまき
て東院に」あまりほとへぬるもさすかにおほさ」れてものは
して日ころのおほつかな」さの事のたまへはまことにはかなき」
世のならひは我^お身身のうへとのみ覺ゆる」にいとゝかやうにそ
ちかき^お事は哀れに」(五六ウ)浅からす侍^お小る中にも姫君のい
たく」おもひ給へると聞侍へるなんまことに」心くるしくさや
うなる人などものせ」ねはむかへ聞えてそ」うしろみ奉つ
らま」ほしくおほえ侍^おりしかとゆるしなき」やうに覺したり
しつゝましさに申も」いてすき侍をいまはかひくしく御」
うしろみなども侍^お小らすときくわたし」聞えて宮のうへなど
ももろともになく」さみ給へかしなとよのつねにてこまやか」
(五七才)にの給へはまことにさやうにもとおほし」なりてむ
かへ給はんにはほいにていと」よくこそ侍らめなどのたまひて
かへり」給ひぬ何となくのとやかなるにおこ」なひのひしつ

かた姫君の御かたへおはし」たれば宰相のめのとしうなと人二三「人はかりさふらひてむかしの事など」いひ出るにや時もわかすうちしほれつゝなかもあへり姫君はちよきき丁ひきよせてそれふし給へり年のほとりも（五七ウ）こよなくおとなひてうへの事などつき」せずおほしなけきたるけにやすこしお」もやせ給へるしもかきりなくみえ給ふ」にひ色のほそなかひきかかねてきた」まへるそ中／＼なめめかしくさまことなるせんさいくより御ふみとであるを」み給へはうすむらさきのしきしにいとこまやかにかき給ひておくつかたに」う小をきし垣ほあれにしとこ夏の花を哀れと誰かみさらん」御返しとくとそのかし聞え給へはいと」（五八オ）つゝましけに覺したれと筆なとりまか」なひて御つしなるうすにひのしきし」とり出てかゝせ奉り給ふ御てなともゆ」くすゑおもひやられていとみまほしく」うつくし」垣ほあれととふ人もなき常夏はおきふしことに露そこほるる」まち見給ふところには何事につけても」さまことなる御ありさまをあはれおほ」さるひんかしの院にはそのうちめ君の」御事を心にかけてのたまへはいとめやすしと」（五八ウ）おほすに齋宮などもむかへ聞えまほしく」の給へと日比の御ありさまこそありかたく」ものし給へと人／＼などみなしもおなし」心にててもてなすへきにもあらずまことに」われなからんあとにそさやうにもゆつり」たてまつらめなとおほしてあとなくて」すぐるに東の院にはつねにさやうに」のたまへはたのもしき人なともなきに」ほとちかしといひなからはなれおはする」もおほつかなくてこなたへうつつろはせ聞え」（五九オ）給ふにもさはかりうしろめたくお

ほしたりし」をさふらふ人／＼もおと／＼もあはれもよ」ほさるうへは姫君のあり様めもあやに」あさましきまで覚えてとの事と」なく覺したるもことづりにみ給ふむかへ」とり給ふてのちはかひ／＼しくつれ／＼もこよなくまきれ給ふはかりもてなし」給ふを人／＼はいつまでとなまこちつき」なくおもふに西の院には中将をそすへ」聞え給たるさてのみひとりすみにて」（五九ウ）おはするをいと心くるしく覺したるに」宮の中納言などねんじろに聞え給へは」いかさまにもうへの御はてすきてさやう」にもなとおほしなりぬわかきとちに」ておはするけにやとの三位の中将と」ことに聞えかし給ひてをかしき花」もみち月のあかきはる／＼なともみす」くさすもろ共にさそひきこえつゝ」覺しかはしたりいまたきけはなるへ」きほとなれとあさまししくしつめ給ひ」（六〇オ）たる御よういもてなし露このよの人」ともおほえすめもかゝやきひかるやう」なる御かたちはさるものにてはかなく」すさみ給へ」ふきものひきものこれこ」そとおほつかなるはなきなかにきむと」ふえとはわか御心にもはれたれはにや」うち聞人もすゝろにものあはれにて」涙おとさぬはなしましてとのほ宮」などはなまよろしくおはせんたにめつらし」さにはをろかにおほされんやいとかはかり」（六〇ウ）なる御ありさまをいとうしろめたきまで」やすきそらなくあやもくおもひ聞え給ふ」うちのおと／＼はうへの御はてになりぬれは」こと／＼なくいとなみ給ふにもむかしをしの」ふ御なみたひまなくおほされつゝ御はて」もすきぬるに宮の中納言わたりには」ほのめかし給ひしこと人しれすこのほと」覺しいそきてけしきたちたまへは」よと／＼もなる

ひとりすみも心くるしくて「さるへきさまにきてつるをさやうに」(六二才) いつしかさたまりてもし思ふにぬよな「らはわかため人のためよしなかりぬへき」ことかなころにまかせて花もみちに「つけてあくかれつるは中／＼よくこそ」有つれなとおほせとまたあなかに「心とまるよすかなとはもちたまはねは」うちはへものうくおほすへきにはあしく「かよひそめ給ひぬ女君のありさまなど」みるかひなくはあらずなよ／＼とあふかに「たゝひとすちにらうたけにて心なん」(六一ウ) みなれ給ふまゝになつかしきやうにて「思ふより見まさりしたる心ちし給へは」たゝ今はいとめやすき御あそひなり年「月もはかなくゆきかへりつゝ内のおとゝ」の姫君も十四になり給ひぬいまたふた「葉よりさまことなりし御さまねひとゝ」のひたるまゝにあたりかゝやくとはかやう「の事にやとみゆるをちゝきみなとは」いとかなしくおぼし／＼につけつゝうへのことつみせすいてゝしほたれ給ふたくひ「(六二才) なる御さま世の中にもり聞えて中宮」と此姫君となんかくめてたくものし「給ふなる事とよの人もやう／＼いふを」うちのいろにおはします御ころにて「ゆかしくおほされつゝ春の花秋の月」とならへてみまほしくおほされければ「女御にまより給ふへきよし御きそくあ」るをちゝおとゝまことさもあらははいかな「ひてうれしかるへきにせんさい宮など」のさはかりありかたくおほするを思ひ「(六二ウ) しらすかほに中宮などの御ためひんなか」らん事ありぬへけれあの御あたりに「そは」かられてはか／＼しき御うしろ「みもなからんましかはや中／＼人わらはれ」なむとおほせはかしこまりてうけひ「き給はす月日もはかなく

すきて秋」のちもくにくはんはくほ「かく三位の中將」中納言にあまり給けしきたつ人／＼「おほかれと心とまへきもみえぬにいとゝ」よの中あはきなくおほされてみるかひ「(六三才) なからん事をねんしすくさんことそ人」のためにわかたためにもいとおほしかるへ「けれなどおほしつゝけてかく今までさた」まり給はぬなるへし八月十日あまりの「月つねよりもくまなくさし出たるに」れいのおほしあぐかれて内のおとゝの「宰相いさなひくせんとてしのひて」さいあんへわたり給へは東の院に「おはするよし聞ゆる人あればもしたつ」ねよりつへくやあるとてやをらりて「(六三ウ) 見給ふに西の対のかたにものゝねあまた」聞ゆればおほつかななくて音をしるへに「てたつねつゝおはしてみなみのへいの」とにたちよりて聞給ふに人ゑあまた「してことひはいつれとなくおかしく」ひきあはせたる中にきんのねは「すくれてくも井にすみのほりて月の」みやこの人もきゝおとろくらんかしと「聞こゆるにわか心にもむかしよりしみに」しみてことにみゝとゝめつゝ聞たまふに「(六四才) 身にしみなつかしくあいきやうつきたる」ものからなまめかしくこれやなへて「ならすさいしやうなどのおもひあかり」たるいもうとならんまことに此ほとに「かよひたらんかたりちはしもゆかしさま」さりてへいのわきの戸おもふやと／＼して「見給ふに心やすくあきぬれはうれしく」て忍びつゝみ給ふに／＼人に人／＼三人「あつゝまへなる前栽に虫ともはなちて」あそふなりけりみすすこしまきあけて「(六四ウ) うちに人あまたゐたりはしにはことひ」く人そゐたるすこし／＼となひてなまめ「かしくみゆ宰相の君とそよふめるいつ」れとなく見わたし

給へはゆく事なからすしもなき中にきんのぬしいつれならん」と見給ふにきんはすこし^{おほ}なりて「ちゆさき木丁によりふしたる人や是」ならんとおほすに「かたふきかゝりたる」かんさしかみのかゝりよりはしめておも「やうひたゆつきなどすへてかはかりなる」(六五才)人をそ^{ゆめ}めの中にもみさりつれと見給ふ「中宮をこそかきりなく世の人も申」われもみたてまつるにまたこれはさまと成ける人かなとつく／＼とまもり給ふに「こそこそ^{おほ}ろか成とにろなくあてに」なまめかしくらうたくあいきやうつき」たゝあたりまでにほひかゝやく心ちする「さやけき月の光りも^{おほ}しけたれぬる」にやとそおほゆるかきりなしとみゆる」きはの人／＼もさすかにみつるは露は」(六五ウ)かりなすらへなる人のなきかなといと浅」ましきまでおほさるゝあいきやうこめ」かしきさまはしも宮もよも^{おほ}とり給はし」あたりもかゝやくはかりなるまみのわたり」などのなまめかしさやこのよになからんとそ「おほさるゝかたはらに火は^{おほ}しやりてね」たる人をみ給へはいきやうつきほこ」りかにてまみのわたりなとさまことに「てなまめかしくあてやかなるそ^{おほ}くれて」みゆれとこれもさるかたにかひなけに(六六才)はあらずにくからぬありさまなりこれや」そちの宮のうへならんとそ^{おほ}しはかり」聞え給ふもしるく宮なんかへらせ給ふとて御かたへいらせ給へとうへなん申させ給ふに」おくのかたより人きていへは何とかうち」かたらひつゝすこし^{おほ}み給へるにほひ」いはんかたなし只こゝもとにて夜もあかし」つへくみつゝ立給へるに宰相の君の」あし^{おほ}とすればかくて見えしといそき」たちのき給へとゝあのほとにたまし^{おほ}は」(六六ウ)入ぬる心ち

してあるにもあらずひきかへ「○」給ひなからたち出給ふにやかて宰相の」中将にい^{おほ}きあひ給へればなにとなく」こゝろのおにゝむねうちさ^{おほ}きてかほ」あかむ心ちするをよくしつめてふ世や」の中はな^{おほ}あかぬよの月にあくかれて」くものうへまでもろ^{おほ}共と思ひ聞えて」たつね奉るにいつくのくまにたちかく」れ給ひにけるにかとほゝ^{おほ}みたまへる」さまいひしらすなまめかしくみえたまふ」(六七才)御心にくまはなはせ給ひたるにやまた」こそしり侍へらねとうちたはふるゝけし」きのにくからすあてになまめかしくしつ」まり人にはことなるにもありつるを」もかけおもひ出られていつしか恋しく」おほさるゝそうちつけるよしのゝおく」まであくかれつる心も立かへりことゝなけ」れはもろともにのりくして殿へおはす」る道すからな^{おほ}かめかちにてものおもひ」そひぬる心ちするを宰相もあやしく」(六七ウ)思ひよらさるたちとこゝろいかなりけ」るにかものゝねをしるへにて立より」給ふに^{おほ}けさりとままことにはいかて」かみ給はんほのかにも見給ひたらん人は」いは木なりともよに^{おほ}たしくはおはせ」しなとそこゝろ^{おほ}こりしておほさるゝ」帰り給ひて打かたらひて^{おほ}かしき物」の音ともあはせてあそひ給ふかた心」にもありつるおもかけにわすれす」浅ましくさへそおほさるゝさいしやうは」(六八才)おほさなくより内のおとゝのふえをいと」よくふきつたへ給ふるに中納言ならふかた」なくふきひゝかしたまへは此きゝ給ふ」には手ふれにくゝ思ひたるそ^{おほ}かしき」あけぬれはさいしやうもかへりたまへるに」思ふ事なくてやづらかなりつる身に」何となくもの思ひそひたる心ちして」いみしきみや／＼といふともあれに^{おほ}

とり」たらん人をえてもあつかはんこそ世に」あるかひなく
心うかりぬへけれよそなからも」(六八ウ)いま「たひみてしか
なと思ひつゝ明ゆく」そらをつく／＼となかめいてゝとみにも」
うこかれぬを大武のめのとよりきて」よへ左大将殿より御ふみ
のさふらひし」かは御らんしらせんとてたつね参らせ」給ひし
かとおおはしまさぬよし聞せ」たまひていとおほつかないにも
のし」給ひしなとかたるを聞給ふにもいて」や何事もものうく
そおほゆるれいせい」みんの女御いとしもすくれ給はねはこ
そ」(六九オ)とし比になり給ひたれとは小／＼しき」こと
ものし給はていまは里かちにも」のし給ふらめこれもとす
くれても聞え」ぬをあり／＼てよすかとかたのみたらん」こそほ
いなるへけれなと思ひつゝけ給ふ」日たかく成ぬれはうち春
宮へ参らん」とおほしてすこしひきつくろひて殿」の御まへに
まより給へるさまのいとめて」たきをれいのさうなくうち末
てそ見」聞え給ふ藤つほへ御ことつけや候らんと」(六九ウ)
申給へは故郷の前裁なともこのほとは」み所侍るを御らんしは
やさせ給はぬ」れいの御いとまゆるしかたき御事にやと」くる
しくこそ侍へれとその給とのには」うへも左大将のもとより心
もとなけに」ものせられたりしをいつとなくいひなし」てすく
さるゝは人のためまことにいかひ」なしいまのよにはおも
／＼しくよき人に」こそいふめれかくつく／＼と」おはせんよ
りは」さやうにものしたまへかしとこまやかに」(七〇オ)聞
え給ふをいとゝものうくおほされてさは」かりものなもののた
まはぬをれいのくる」しくおほしたるなめりとこゝろえ給ふ」
にえしゐいても聞え給はす内へまゐらすへ」きよし院へそうせ

られたりと聞侍へりし」かはそのうへにかすならぬ身にてきし
ろひ」申さんはひんなくこそはあらめとからうし」ての給ふけ
しきのいとむつかしとおほえ」たれはいてやいみしきみかとの
御むす」めなりともこのありさまにてもものうく」(七〇ウ)お
ほしたらん事はあちきなるへしましてたゝ」人のむすめふひ
んなりといふはかりこそあれ」よのつねならん人はならひに
つゝおほしたらんこと」はりなりましていとすくれてとも聞え
すなと」御心ひとつにことわり給ふしはしさふらひて」たち給
ふうしろよういなといかてかくしも」よろつにすくれ給ひけむ
とつきす見を」くり給ひけるまそ

貼付されていない紙片の内容を以下に示す。

五〇ウ など ウ五行

六二ウ くはんはくほかく」ウ七行

六四オ 五行」くたりはしも」六行」おもふやとをして」オ

〔付記〕貴重な資料の翻刻をご許可くださった金沢大学附属図書館に
御礼申し上げる。

なお、本稿は科学研究費助成金若手(B)『吾の衣』諸伝本の本文
研究及び校本作成」(課題番号 16K16774)の成果によるものである。

〔注〕

(一) 今井源衛「王朝物語の終焉」(『国語と国文学』第四一巻第一〇
号、一九五四年一〇月)

(二) 市古貞治・三角洋一編『鎌倉時代物語集成』第三卷(笠間書院、
一九九〇年)

(三) 麻原美子 『苔の衣』 絵巻の研究と本文 (一) (二) (三) (日本女子大学紀要(文学部)、第三六・三七号、一九八七・八八年三月)

(せきもと まさの・北海学園大学人文学部講師)